

### 【旧約聖書日課】創世記 9章8～13節

8神はノアと彼の息子たちに言われた。9「わたしは、あなたたちと、そして後に続く子孫と、契約を立てる。10あなたたちと共にいるすべての生き物、またあなたたちと共にいる鳥や家畜や地のすべての獣など、箱舟から出さずすべてのもののみならず、地のすべての獣と契約を立てる。11わたしがあなたたちと契約を立てたならば、二度と洪水によって肉なるものがことごとく滅ぼされることはなく、洪水が起こって地を滅ぼすことも決してない。」

12更に神は言われた。「あなたたちならびにあなたたちと共にいるすべての生き物と、代々としえにわたしが立てる契約のしるしはこれである。13すなわち、わたしは雲の中にわたしの虹を置く。これはわたしと大地の間に立てた契約のしるしとなる。」

### 【使徒書日課】ローマの信徒への手紙 6章3～11節

3それともあなたがたは知らないのですか。キリスト・イエスに結ばれるために洗礼を受けたわたしたちが皆、またその死にあずかるために洗礼を受けたことを。4わたしたちは洗礼によってキリストと共に葬られ、その死にあずかるものとなりました。それは、キリストが御父の栄光によって死者の中から復活させられたように、わたしたちも新しい命に生きるためなのです。5もし、わたしたちがキリストと一体になってその死の姿にあやかるならば、その復活の姿にもあやかれるでしょう。6わたしたちの古い自分がキリストと共に十字架につけられたのは、罪に支配された体が滅ぼされ、もはや罪の奴隷にならないためであると知っています。7死んだ者は、罪から解放されています。8わたしたちは、キリストと共に死んだのなら、キリストと共に生きることにもなると信じます。9そして、死者の中から復活させられたキリストはもはや死ぬことがない、と知っています。死は、もはやキリストを支配しません。10キリストが死なれたのは、ただ一度罪に対して死なれたのであり、生きておられるのは、神に対して生きておられるのです。11このように、あなたがたも自分は罪に対して死んでいるが、キリスト・イエスに結ばれて、神に対して生きているのだと考えなさい。

## 【福音書日課】ルカによる福音書 24章1～12節

1そして、週の初めの日の明け方早く、準備しておいた香料を持って墓に行った。2見ると、石が墓のわきに転がしてあり、3中に入っても、主イエスの遺体が見当たらなかった。4そのため途方に暮れていると、輝く衣を着た二人の人がそばに現れた。5婦人たちが恐れて地に顔を伏せると、二人は言った。「なぜ、生きておられる方を死者の中に捜すのか。6あの方は、ここにはおられない。復活なされたのだ。まだガリラヤにおられたころ、お話しになったことを思い出さない。7人の子は必ず、罪人の手に渡され、十字架につけられ、三日目に復活することになっている、と言われたではないか。」8そこで、婦人たちはイエスの言葉を思い出した。9そして、墓から帰って、十一人とほかの人皆に一部始終を知らせた。10それは、マグダラのマリア、ヨハナ、ヤコブの母マリア、そして一緒にいた他の婦人たちであった。婦人たちはこれらのことを使徒たちに話したが、11使徒たちは、この話がたわ言のように思われたので、婦人たちを信じなかった。12しかし、ペトロは立ち上がって墓へ走り、身をかがめて中をのぞくと、亜麻布しかなかったので、この出来事に驚きながら家に帰った。

### 思い出す【こども説教のために】

イースターおめでとうございます。主イエスのご復活をお祝いしましょう。十字架で死なれた主イエスは、墓に葬られましたが、三日目にご復活なされました。主イエスのご遺体は、岩に掘った墓の中に収められていましたが、三日目の朝、女の弟子たちがその墓を訪ねると、墓の中にあるはずのご遺体がなかったのです。途方に暮れていると、輝く衣を着た二人の人が現れました。天使でしょうか。その二人の人は言うのです。「あの方は、ここにはおられない。復活なされたのだ」。

そう言われても、そこには、横たえられているはずのご遺体もなければ、生き返られた姿の体があったわけでもありません。あるのは、空っぽの墓と、そこで不思議なことを語る輝く姿の二人の人だけ。主イエスは、どこにも見当たらないのです。本当に「復活なされた」のでしょうか。

輝く姿の二人の人は、ただ、「思い出さない」と告げるのです。かつて、ガリラヤの町や村を共に巡って旅したときにお語りくださったこと、エルサレムに向かう道で言われたことを、「思い出さない」と。

そう告げられて、女の弟子たちは、主イエスのお語りくださった言葉を一つ、また一つと、思い出し始めました。思い出しては、お互いに確かめ合いました。そして、ほかの弟子たちに伝え始めました。主イエスはどこにも見えなくても、「生きておられる」。そう伝えないではいられなかったのです。

## 見当たらない

三年前のイースターの祝いの日、わたしは、ここで、ほんの数人の奉仕者と共に礼拝を執り行いました。その日から、わたしたちの教会は、礼拝をオンラインでお届けすることと引き換えに、集まりを制限し始めたのです。それからちょうど三年経ったイースターの祝いの今日、わたしたちは、子どもも大人も一堂に会して一つの祝いの礼拝に加えられることになりました。

あの日、ほとんど空っぽの礼拝堂でイースター礼拝を執り行った日のことを、わたしは、忘れることができません。「空っぽの墓とは、この、人の気配のない礼拝堂のことを言うのではないか」。礼拝を執り行いながら、いくども、そう自問自答しました。「そうであれば、ここに立たされている自分は、あの輝く衣を着た二人の人のように、告げなければいけないのではないか。『あの方は、ここにはおられない』と」と。

今日、わたしは、皆さんをお迎えして、祝いの礼拝に立たせていただいています。三年前、空っぽだった礼拝堂に、今日は、大勢の皆さんがいらっしゃる。三年前、歌う者も、語る者も、聞く者も、ほとんどいかなかったここに、今は、歌う人、語る人、聞く人がいらっしゃる。そうです、わたしが歌わなくても、今日は、ここにいる皆さんが歌ってくださるでしょう。わたしが語らなくても、皆さんが語ってくださるでしょう。そして、聞いてくださるでしょう、歌う者の声を、語る者の言葉を。

語る者がいて、聞く者がいる。聞いた者が、今度は語る者になり、語った者が、今度は聞く者になる。わたしたちが共に集まるとき、その連鎖は、とめどなく続きます。一人が語るのではありません。聞いた者は、口を開いて応答するのです。聞いたのに、口を開きもせず、何も応えないとすれば、その人は、自分を殺しているのです。存在しない者になっているのです。死んでいると同じ者になっているのです。自分だけでなく、語る相手をも。

もちろん、牧師が語るときに眠気が襲い、皆さんの意識が遠のき、他の雑念に捕らわれてしまうことがあるのは、牧師の責任でしょう。皆さんが責められることはありませんし、たとえ礼拝中に居眠りしたからと言って、帰りに謝られたりする必要はありません。とは言え、「今日は居眠りしました」と一言おっしゃってくださるのは、むしろ、ありがたいことです。そのようにして、語った者に対して応えてくださっているからです。

礼拝堂が空っぽであったならば、どんなにあがいても、たとえ牧師が誰よりも雄弁に語ったとしても、虚しいことです。語ったことを聞いて、応えてくれる人がいないのですから。それは、語る言葉を聞いて、応えてくれる者を、死者の中に捜すようなものです。空の墓の中に、生きている者、語る言葉を聞いて応えてくれる者を捜しても、仕方ないのです。

## 生きておられる方

遺体の見当たらない墓で、光り輝く姿の二人の人は、女の弟子たちに告げました、「**まだガリラヤにおられたころ、お話しになったことを思い出さない**」と。主イエスが言われた言葉を思い出すようにと促されたのです。そして、彼女たちは、主イエスの言葉を思い出しました。

きっと、彼女たちは、一人ひとりが思い出に耽るようにして、主イエスの言葉を思い出していたわけではなかったでしょう。単に思い出に耽っただけであれば、それは一人の経験でおしまいです。彼女たちは、一人ではありませんでした。**マグダラのマリア、ヨハナ、ヤコブの母マリア**という三人の名が記されていますが、彼女たちだけでもなかったのです。**一緒にいた他の婦人**たちが、三人に加わっていました。彼女たちは、行動を共にする仲間たちの中で、主イエスの言葉を思い出したのです。「そういえば、あのとき、主イエスはこんなことをおっしゃっていた」とか、「あの人には、こう言われたのよ」とか、そんなやり取りを想像したくなります。

葬儀を執り行うに際して、故人の生前の逸話をあれこれと聞かせてくださる方が必ずいらっしゃいます。偏見かもしれませんが、そういう話をしてくださるのは、女性が多いように思います。ずいぶん昔の小さな逸話、小さな一言を、覚えていらっしゃる。仲間との間で何度も語ってこられたのだろうと想像させられるような語り方で、お話しくださるのです。仲間と語り合うことを通して、思い出し、確かな記憶にされているのではないのでしょうか。

女の弟子たちが、あの二人の人に促されて主イエスの言葉を思い出していたとき、使徒たちは、彼女たちの言うことをたわ言のように思って聞いていました。でも、彼女たちは、たとえ「たわ言だ」と言われても、語り続けたのでしょう。仲間と語り続け、そして、使徒たちにも語り続けたのでしょう。

繰り返し、しつこく聞かされれば、「たわ言」だと思っても、気になるものです。ペトロは、どうしても自分で確かめたくなくて、墓まで出向いてみました。もう「たわ言だ」では済まされなくなり始めていたのです。

弟子たちの間で、主イエスのお語りくださった言葉を思い出す歩みが、始まったのです。思い出された言葉を仲間と語り合うことを通して、彼ら彼女らの間で、主イエスの語られた言葉は、確かな記憶となり始めたのです。

主イエスが、ご自身の言葉を著作に残されていたら、弟子たちのこのような営みは起こらなかったかもしれません。しかし、何も文字に記されなかった主イエスの語られた言葉を、弟子たちは皆、思い出し、語り、それを聞き、また新たに思い出し、語り続けたのです。

主イエスを「**死者の中に捜す**」のではない。「**生きている者**」たちの交わりの中に捜し始める。それが、弟子たちのイースターの始まりだったのです。